

Tilburg University

Learning with the same text

Broeder, Peter; van Wijk, Carel

Published in:
Language Teacher Education

Publication date:
2021

Document Version
Publisher's PDF, also known as Version of record

[Link to publication in Tilburg University Research Portal](#)

Citation for published version (APA):
Broeder, P., & van Wijk, C. (2021). Learning with the same text: Language skills required for non-native learners in secondary education. *Language Teacher Education*, 8(1), 16-19.

General rights

Copyright and moral rights for the publications made accessible in the public portal are retained by the authors and/or other copyright owners and it is a condition of accessing publications that users recognise and abide by the legal requirements associated with these rights.

- Users may download and print one copy of any publication from the public portal for the purpose of private study or research.
- You may not further distribute the material or use it for any profit-making activity or commercial gain
- You may freely distribute the URL identifying the publication in the public portal

Take down policy

If you believe that this document breaches copyright please contact us providing details, and we will remove access to the work immediately and investigate your claim.

Japanese edition

Online edition: ISSN 2188-8264

Print edition: ISSN 2188-8256

Language Teacher Education

言語教師教育

【Vol. 8 No. 1】

JACETSIG-ELE Journal
JACET教育問題研究会 会誌



JACETSIG-ELE Journal

Language Teacher Education and Related Fields

March 2021

JACET SIG on English Language Education

<http://www.waseda.jp/assoc-jacetenedu/>

【招待論文】

同じテキストで学ぶ：教育言語を母語としない学習者に必要な言語技能—中等教育の場合—

Peter Broeder and Carel van Wijk

今村洋美 訳

要旨

学校の教育言語を母語としない生徒が学校で成功を収めるには、学校で使用されている言語の特性を習得する必要があると考えられる。本稿では、中等教育においてそのような生徒に求められる言語技能項目をリストにして提案する。リストには5つのコミュニケーション能力が示されている。つまり、言語（語彙、文法）、文章（読む、書く）、インタラクション（受容、産出）、修辞（内容、プレゼンテーション）、情報（整理、検索）に関する能力である。各能力リストは、言語の専門家とのインタビューと学校教師への調査に基づいて作成されている。

キーワード

学校での成功、言語能力、中等教育

1. はじめに

世界中で、教師は文化的・言語的に多様な背景を持つ生徒のいるクラスに直面している。生徒の中には、学校で使うことが期待されている言語（訳者注：以降、学校ことば）を十分使いこなせない者が多数いることが判っている。学校で成功するには、認知能力と同様、おそらく学校ことばの運用能力にも左右されるので、このような生徒は不利な立場に置かれているのである。

本稿では、どのような種類の言語能力が教室で必要とされているかについて理解を深めることに焦点を当てる。最初に、学校ことばの習得に関する2つの理論的視点について簡単に論じる。次に、学校教育を成功裏に継続するために、生徒が身につけたと考えられる言語能力リストについてより詳細に述べる。最後に、言語能力自体ではなく、学校で教えられている全科目の利益のために、言語教育を中心に据えることを願いながら本稿を締めくくる。

2. 学校ことばの習得

生徒が中等教育に進む時に直面する変化やさらなる困難点を明らかにしようとする取り組みが、2つの異なる分野で行われている。社会認知と機能言語学からのアプローチである。

社会認知での取り組みでは、生徒が中等教育に進む時点では、相応の語学力がまだ十分に自動化されていないという事実を強調する（例えば、Cummins 2008 参照）。日常会話では、意味は文脈から得られることがよくある。一方学校では、言語ははるかに抽象的である。すなわち、意味を認識するのはかなり困難で、明示的な説明が必要となる場合も多い。言わ

れたり書かれていることを理解しようとする時、文脈上の支えが欠けると、学校ことばの習得が、多くの訓練を要する厳しい課題となる。

機能言語学でのアプローチは、言語は使用されている社会的文脈に応じた機能を常に有する、という考え方に基づいている。学校ことばは1種のレジスター、つまり、学校の文脈内で典型的に使用されている言語的特徴と意味のまとまり、と見なすのが最適であるとする考え方である（詳しくは、Schleppegrell 2020 参照）。このレジスターの習得は、親や教師によるインプットの量にかかっている。従って、レジスターを生徒に馴染ませるには、大量の口頭でのやり取りが必要である。

この2つのアプローチは、生徒の学校での成功はある特定の言語の習得に左右される、という中心的な問題を強調している点で共通している。異なるのは理論的な説明である。不完全な自動化（社会認知）に対して不十分な知識（機能言語学）という観点の違いである。その結果、指導方針が異なることになる。トレーニング（社会認知）対モデリング（機能言語学）となる。社会認知的アプローチは、主として「どのように行うか」に焦点を当てているのに対し、機能言語学的アプローチは「何を教えるか」に焦点を当てる。

生徒が直面しなければならない言語の課題について考察し改善を図りたいならば、学校ことば固有の言語特性に関する機能言語学的な「長たらしいリスト」に固執はできない（Snow & Uccelli, 2009）。簡潔・完全でかつ実用的なリストが必要である。本稿では、機能言語学的特徴の記述と社会認知の処理要件とを組み合わせることによって、リストを策定することを提案する。つまり、言語的特徴のリストを言い換えて、より簡便な言語技能項目のリストを作ることは可能である。技能は具体的な行動の指示として定義される。例えば、「複雑な構文を避ける」（訳者注：表1の文法技能の項参照）という項目において、「複雑な」という用語は、理解や魅力を損なうと伝統的に見なされてきた文型を集めたリストを1語で表現したものである。

3. 学校ことばの特徴

Byram (1977) や Thürmann and Vollmer (2011) によって提案されたモデルを基にして、表1のリストの枠組みを作成した。この表は、5つのコミュニケーション能力とそれぞれの能力に関連した言語技能を示している。5つの能力は、言語、文章、インタラクション、修辭、および情報に関する能力である。最初の2つの能力は、言語に直接結びついており、次の2つは社会での言語運用力を表し、最後の5つ目の能力は主として補助的でメタタイプの機能を備えている。

表1に掲載されている技能項目を検討・再構成して練り上げるために2つの研究が行われた（Broeder & Kistemaker, 2015）。第1の研究は、ヨーロッパの言語習得と言語政策の専門家にインタビューした質的研究であった。第2の研究は、量的研究で、ドイツの中等学校の教員を対象に行われた調査であった。

表 1. コミュニケーション能力とその能力に関連した言語技能

言 語 能 力	<p>語彙技能:</p> <p>次のことに精通する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 教科に関連した専門用語 ・ 接続詞と前置詞 ・ 法助動詞, 法副詞 ・ 借用語の語源と意味 ・ 一般的な慣用表現 ・ 一般化した略語 	<p>文法技能:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 具体的で明確な指示表現を使う ・ 動詞の時制を適切に使う ・ 新たな文法事項はしっかり押さえる ・ 無終止文は避ける ・ 文頭や文中の従属節は慎重に使う ・ 名詞化や受動態化は慎重に使う ・ (前置詞句が連続するような) 複雑な構文を避ける ・ くれた表現に気づく
文 章 能 力	<p>読む技能:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 要点がわかる ・ 長い文章の要旨をまとめる ・ 文章の文脈や目的に注意を払う ・ 様々な資料にある情報を関連づける ・ 視覚化された情報を理解する ・ (批判的に) 再検討する 	<p>書く技能:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 正しい綴りや句読点を使用する ・ 正しく注意深く文を組み立てる ・ 文章の一貫性に注意を払う ・ 曖昧さや憶測を避ける ・ 基本的な文章形式を区別する
イン タ ラ ク シ ヨ ン 能 力	<p>受容技能:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ (十分) 注意して聞く ・ 必要であれば説明を求める ・ 妥当で的を射た質問をする 	<p>産出技能:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 妥当で適切な答えをする ・ 議論に積極的に参加する ・ 教師や仲間にフィードバックする ・ 気軽に議論 (反論) する
修 辞 的 能力	<p>内容技能:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 物事の名称や定義を明確に述べる ・ 明確に要約して論旨を整える ・ 状況に応じて説明したり語ったりする ・ 説明, 評価, 議論する方法とタイミングを知っている 	<p>プレゼンテーション技能:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 聴衆や読者を念頭におく ・ 視聴覚資料を適切に使用する ・ 書かれた文章を分かりやすく魅力的に編集する ・ 非言語的でパラ言語的ヒントを加えて話す内容を分かりやすく生き生きとしたものにする
情 報 能 力	<p>整理技能:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ メモを取りそれをまとめる ・ 読んだり書いたりする際「準備・実行・評価」の枠組みに従う 	<p>検索技能:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 未知の語や馴染みのない概念の意味を見つける ・ 図書館やインターネットで資料を見つける

言語能力は、語彙技能と文法技能を取り上げている。生徒は語彙をさらに増やしていくことに慣れ、同時に文章をより複雑で説得力のあるものにする方法に慣れなければならない。文章能力は、より長い文章を読んだり書いたりする際に必要とされる多くのスキルを指す。そ

のスキルのいくつかは言語能力にも依存している。インタラクション能力は、「表面化する」言語と関係がある。これらのスキルは、他の人に話を聞いたり応答する際に必要となる。修辭的能力は、理解したり説得したりする両方の点で、効果を最大限発揮することと関係がある。これらのスキルは、書かれたり述べられる全ての内容（「何」）とプレゼンテーション（「どのように」）に関係する。情報能力は、うまく処理する任務、すなわち、他の能力のそれぞれで十分発揮できるよう指示するのを助けるメタタスク、と関係がある。

4. 今後の展望

生徒は、同じような言語スキルを身につけた状態で入学してくることはない。そして確かに、すべての生徒が必要なレベルの能力を備えているわけではない。このことは学校教育の効果について、認知的観点と動機付けの観点の両方から、深刻な結果をもたらす。学習結果は劣ってしまい、「学習の喜び」は無くなってしまう。学校は言語スキルの訓練に、もっとしっかりと注意を払う必要がある。このことは、カリキュラム全体に影響を及ぼす。言語は、別々の孤立した学校の科目の1つではない。言語は、内容に関係なくすべての学校の授業で成功をもたらすための手段である。本稿で示した一覧表が、生徒が学習の基本である言語の理解と言語を産み出す能力を身につける助けとなることに貢献することを願っている。

参考文献

- Broeder, P. & Kistemaker, M. (2015). More willingly to school: Tools for teachers to cope with linguistically diverse classrooms. *Intercultural Education*, 26, 218-234.
- Byram, M. (1997). *Teaching and assessing intercultural communicative competence*. Clevedon: Multilingual Matters.
- Cummins, J. (2008). BICS and CALP: Empirical and theoretical status of the distinction. In Street, B. & Hornberger, N. (Eds.), *Encyclopedia of language and education* (pp. 71-83). New York, NY: Springer.
- Schleppegrell, M. (2020). The knowledge base for language teaching: What is the English to be taught as content? *Language Teaching Research*, 24, 17-27.
- Snow, C. & Uccelli P. (2009). The challenge of academic language. In Olson, D. & Torrance, N. (Eds.). *The Cambridge handbook of literacy* (pp. 112-133). New York, NY: Cambridge University Press.
- Thürmann, E. & Vollmer, H. (2011). *A framework of language competences across the curriculum: Language(s) in and for inclusive education in North Rhine-Westphalia (Germany)*. Strasbourg: Council of Europe (www.coe.int)